

SUPPLEMENT TO GENES GENET.SYST. (2024)99(1) February 2024

GSJ コミュニケーションズ

PROCEEDINGS OF THE SOCIETY

GENETICS SOCIETY OF JAPAN (GSJ)

◆創立1920年◆

公益財団法人 遺伝学普及会 日本遺伝学会

<https://gsj3.org>



目 次 頁

2024年度日本遺伝学会年会費ご納入のお願い 3

日本遺伝学会第96回大会へのお誘い 4

惜別 坂口文吾名誉会員 2022/4/27ご逝去
中島裕美子・日下部宜宏 5

根井正利名誉会員 2023/5/18ご逝去
斎藤成也 7

大坪久子シニア会員 2023/7/30ご逝去
本橋令子, 高橋 文 10

中田篤男名誉会員 2023/12/3ご逝去
山田雅巳, 石野良純 14

日本遺伝学会木原賞および奨励賞候補者推薦のお願い 20

本 会 記 事

会員異動 21

2024年度日本遺伝学会年会費ご納入のお願い

平素より皆様には日本遺伝学会の発展に対し、いろいろとご支援を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、2024年度日本遺伝学会年会費を、下記郵便振替口座または、クレジットカード払いにてご納入下さいますよう、よろしくお願いいたします。

なお、年会費のご納入につきましては、当学会 HP (<https://gsj3.org>) の入退会・年会費の会費納入記録をお確かめいただきますようお願い致します。

普通会員	10,000円
学生会員 ^(注1*)	3,000円 (学生会員は初年度会費は免除)
シニア普通会員	6,000円
シニア永年会員	初回のみ 30,000円, 以降の年会費は免除
教育会員	2,000円

(注1*) 学部学生と大学院生が対象です。学生であることが証明された場合のみ、初年度会費が免除されます。

●郵便振替の場合

口座名義 日本遺伝学会

口座番号 00890-1-217316

●他の金融機関(ATM)から、ゆうちょ銀行の口座へ振込・振替をされる場合

***** 他金融機関からの振替口座番号 *****

・店 名 ○八九 (ゼロハチキュウ)

・預金種目 当座預金

・口座番号 0217316

*お手数料が別途かかります。

●クレジットカードご利用にて会費をご納入いただく場合

学会 HP (<https://gsj3.org>) の会員ページへアクセスして、クレジットカード支払 (VISA と MASTER) を選択して、ご入金手続きをお願いします。

日本遺伝学会第96回大会へのお誘い

日本遺伝学会第96回大会 大会委員長 石井浩二郎
(高知工科大学)

日本遺伝学会第96回大会を、2024年9月4日（水）から6日（金）まで、高知工科大学永国寺キャンパス（<https://www.kochi-tech.ac.jp/about/campus/introduce/>）において開催することになりました。現在、開催に向けて鋭意準備を進めております。日本遺伝学会大会の高知県での開催は史上初、四国での開催も60年ぶりです。貴重な機会であり、皆さま是非とも奮ってご参加下さい。主要な情報は、今後大会ホームページ（<https://gsj96kochi.com/>）を通じて順次公開していく予定です。

大会プログラムでは、例年と同様に、口頭発表による一般講演と、ワークショップ、国内シンポジウムおよび国際シンポジウムを計画しています。ワークショップについては、今後テーマを広く公募します。どうぞ奮ってご応募ください。また、若い参加者の発表の機会を広げるため、修士課程大学院生と学部生によるポスター発表を第96回大会でも行います。なお、優れた一般講演には発表審査委員の投票で選出される Best Papers (BP) 賞が、優れたポスター発表には学会参加者全員の投票で選出される Young Best Posters (YBP) 賞が授与されます。BP 賞も YBP 賞も、受賞者は会期最終日の総会の中で発表されます。大会は最後まで目が離せません。様々な世代の皆さまの積極的なご参加をお待ちしております。

さらに、会期翌日の9月7日（土）には、高知県立牧野植物園（<https://www.makino.or.jp/>）において、公開市民講座『すごいぞ！四国の植物遺伝資源』を開催します。牧野植物園は、「日本植物分類学の父」として知られる高知県出身の植物学者・牧野富太郎の功績を称えて設置された最先端の美しい植物園です。牧野富太郎の人生と偉業は、NHK 連続テレビ小説「らんまん」を通じて皆さまの記憶にも新しいかもしれません。そのような牧野植物園の園内施設を使って、本市民講座では、四国の植物や植物研究の魅力を中高生や一般の方々にもわかりやすく伝えていきます。牧野植物園や大学に所属の研究者の貴重な講演に加えて、参加者体験型のイベントも準備しています。学会員の皆さまも含め、誰でも気軽に楽しめる市民講座になることを期待しております。

高知は、四国において三方を山に囲まれ南には太平洋を臨み、地理的には少々孤立しがちです。ですがそのおかげで、高知には独自の文化と豊かな自然が育まれています。また、実は交通の便もそこまで悪いわけではありません。理由がなければ訪れる機会もなかなか少ない高知かもしれませんが、本大会はその絶好のチャンスです。皆さま是非とも自らの足で高知の地を踏みしめて、その良さを存分に堪能いただけたら幸いです。

皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

惜 別

追悼 坂口文吾名誉会員

坂口文吾先生のご逝去を悼む

九州大学教授 中島裕美子
九州大学教授 日下部宜宏

カイコ、ショウジョウバエの遺伝学研究を通して、日本遺伝学会をはじめとする多くの学会に永く貢献された坂口文吾先生は、昨年、令和4年4月27日に享年97歳でご逝去されました。

坂口先生は、昭和25年に九州大学農学部農学科を卒業され、同年国立遺伝学研究所に勤務された後、昭和36年に形質遺伝部第2研究室長に昇任されました。その後、昭和41年に九州大学農学部にて助教授として赴任され、昭和52年教授に昇任後、昭和63年に停年退官されるまで、農学科蚕学講座を担当し、カイコ並びにショウジョウバエの遺伝学に関する研究に従事するとともに、学部学生及び大学院学生の教育と研究指導熱意を持って取り組まれ、多数の優れた人材を育てられました。さらにこの間、九州大学評議員、農学部附属家蚕遺伝子実験施設長、学外にあっては、日本蚕糸学会理事、日本蚕糸学会九州支部長、農林水産省農業資材審議会委員、文部省学術審議会専門委員、日本学術会議改革委員会委員などを歴任され、九州大学の運営ならびに学術の発展に貢献をされ、定年退官後には九州大学名誉教授の称号が授与されています。

先生の研究は、昆虫の発生遺伝学で、カイコの母性遺伝突然変異の一つ「黄色致死」系統におけるプテリジン色素代謝経路を解析し、母親による致死性誘導についての理論を確立されました。この研究は、昆虫の色素代謝系の理解を深めたものでもあり、これらの業績により第35回日本遺伝学会賞を受賞されました。また、カイコ体節異常突然変異をもたらし「E複合座位」遺伝子の作用機作を追究し、ガンマー線照射により多数の新しい異常体節系統を作出、カイコへの外来遺伝子DNA導入の微細注射技法を確

立されるなど、そのご功績は、世界を先導するものであり、先生の先見の明を示すものでした。

一方、ショウジョウバエの発生遺伝学の分野でも、感染性の異常雌雄性比因子として知られていたSR因子研究を進められ、昭和34年から2年間のアメリカ合衆国エール大学における留学中に、それまで不明であった同因子がスピロプラズマであることを初めて見出されました。この功績により第1回山路自然科学奨学賞を受賞されました。

坂口先生の思い出としては、ご専門分野はもちろん、科学全般に対する好奇心がいっぱいで、学生にも色々なことについて目を輝かせて語りかけておられたお姿が思い浮かびます。

私（九州大学中島）の卒業論文の指導教員は坂口先生で、ショウジョウバエの雄殺しのスピロプラズマに関する研究でした（その間スピロプラズマの培養の可能性を坂口先生が視野に入れ、私を遺伝研の黒田行昭先生の研究室へ数週間派遣してくださいました。）が、修士過程に進学するにあたって、この研究を続けるか疑問があり、坂口先生に相談したところ、先生の教え子の長山淳哉先生が講師、清原千香子先生が助手をしていた医学部公衆衛生で実験・研究をさせてもらえるよう先方の教授にお願いしていただきました。1年生の春から医学部で実験をさせてもらっていましたが、結局、先生にまた頭を下げていただいて医学部から、農学部の坂口先生の研究室に蚕学に戻ったという思い出があります。当時のことを考えると、快く私の研究室復帰を認めてくださった先生に、本当に申し訳なく思うと同時に感謝しています。

私が学生として在籍していた当時は、坂口先生は理学部の先生方との交流が多く、先生のご紹介で、細胞遺伝学の山崎常行先生の研究室で遺伝子解析の実験方法を教えていただいたり、集団遺伝学の権威だった向井輝美先生の講義や、向井先生がお呼びした外国人の先生（欧米のか

たがた)の講義に、坂口先生の計らいで参加させてもらったものの、全て英語で、農学科との違いを感じました。

また、私の父親がタンデム加速器施設の助教授だった当時、坂口先生と二人で蚕の卵に放射線をあてる実験ができるか父のところへ一緒に行き、実験条件などで結局断念してしまいましたが、その影響もあって放射線に興味(資格取得を含め)をもった私が修士1年の冬に放射線医学総合研究所に約1ヶ月半、放射線合宿講習会に旅費を出してもらっていかせていただきました。坂口先生は多くの外国人研究者、アジア

からの留学生を受けれていました。マリアン(Dr. Marian Goldsmith)、フィッツアール先生(Dr. Malcolm FITZ-EARLE)、盧時甲先生(当時は大学院博士課程の院生)などさまざまな国からの外国人が多く訪れ、その先生方やご家族と一緒にハイキングやスケートに行った思い出は今も心に残っています。先生のご自宅での忘年会や新年会も楽しい思い出です。この当時のマリアン、盧先生とのつながりは私が大学に職を得てから非常に役にたったと感謝しています。

これまでのご指導ご功績に感謝申し上げますとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。



坂口文吾教授業績集より(1988年4月)



1989年「蚕糸科学功績賞」受賞パーティにて



当時(1983~1984年頃)留学生として蚕学講座で実験をしに来訪されていた、中国と台湾の大学の先生を囲んでの送別会。

前列中央が坂口文吾先生、前列右は古賀克己先生、最後列左から藤井博先生、河口豊先生、前から2列目左から2番目が伴野豊先生、4番目が筆者



前列左から古賀克己先生、坂口文吾先生、4番目が土井良宏先生、最後列 右から河口豊先生、藤井博先生、5番目が伴野豊先生、2列目左から4番目が筆者

追悼 根井正利名誉会員

根井正利先生を偲ぶ

斎藤成也

根井正利先生は1931年（昭和6年）1月2日に、宮崎県でお生まれになった。私は根井先生がテキサス大学ヒューストン校の教授をされていた時に教えを受けた者である。GSJ コミュニケーションズの編集部から依頼を受けたので、ここで根井先生について簡単にご紹介したい。

根井先生は1953年に宮崎大学農学部を卒業されたあと、京都大学農学部の大学院に入学され、1955年には修士号を取得された。引き続き、同大学大学院の博士課程に進学されたが、1958年には京都大学農学部の助手に採用された。また1959年には京都大学から農学博士号を授与された。助手を3年間ほど務められたあと、1962年に千葉にある放射線医学総合研究所の研究員に採用された。なお、京都大学の助手をされていた1960年から1961年のあいだに、ロックフェラー財団のフェローシップを受けて、1年間米国で学ばれている。

1963年に結婚され、1965年には、同研究所に新設された集団遺伝学研究室の室長になられた。そして1969年には米国に渡られ、ロードアイランドのプロビデンスにあるブラウン大学生物医学部の准教授になられた。2年後の1971年には、若干40歳で同大学の教授に採用されている。ブラウン大学では、Margaret Kidwell と横山疎三が大学院生として根井研究室に参加した。また台湾から来た Wen-Hsiung Li は形式的には別の教員が大学院の指導教授だったが、実質的には根井先生の指導を受けた。

1972年には、「根井の遺伝距離」として著名な新しい遺伝距離を提唱する論文（Nei, 1972）を發表されている。なおこの論文は2024年の現時点で13,919の引用件数を誇っている。この距離を用いて、三大人種（コーカソイド、ネグロイ

ド、モンゴロイド）の間の遺伝的差を推定した論文を、当時根井研究室のポストドクをしていた Arun Roychoudhury 氏とともに、Science に發表されている（Nei and Roychoudhury, 1972）。その後さらにデータを集めて、1974年に米国人類遺伝学会の機関誌に論文を發表された（Nei and Roychoudhury, 1974）。これらはどちらも、コーカソイドとモンゴロイドが遺伝的に近く、ネグロイドは少し両者から離れているという結果であり、その後ミトコンドリア DNA のデータをもちいて主張された新人の出アフリカ説を予感させるものだった。

時間が前後するが、1972年には、テキサス大学ヒューストン校生物医学部に新設された CDPG（Center for Demographic and Population Genetics）の教授として赴任している。Arun Roychoudhury 氏がブラウン大学からテキサス大学に根井先生とともに異動した。ヒューストンでは、このほかにポストドクとして Paul Faust と Ranajit Chakraborty が、Aravinda Chakraborty と館野義男が大学院生として参加した。また Wen-Hsiung Li が1973年にはポストドクとして加わっている。その後 Ranajit Chakraborty と Wen-Hsiung Li は CDPG の教員となり、最終的にはどちらも教授となった。なお1975年に、根井先生は分子集団遺伝学の教科書 “Molecular Population Genetics and Evolution” を North-Holland から刊行された。

1980年には、九州大学で博士号を取得した五條堀孝氏がポストドクとして、また大学の同級生だった田嶋文生氏が大学院生として根井研究室に加わった。1981年にはイスラエルから Dan Graur が、また1982年には私が大学院生として根井研究室に加わった。

根井先生を中心とした研究者の尽力により、1983年には雑誌 Molecular Biology and Evolution が刊行され、同時にこの雑誌は新設された国際学会 SSMBE の機関誌となった。もっとも SSMBE

が学会として実質的な活動を開始したのはそれから10年後の1993年である。翌年の1994年にはこの学会の会長に就任されている。

1987年、根井先生はコロンビア大学出版会から“Molecular Evolutionary Genetics”という教科書を刊行された。五條堀孝氏と私は二人でこの本を和訳し、1990年に共立出版から『分子進化遺伝学』というタイトルで刊行した。

1990年、根井先生はついに18年滞在したヒューストンを離れ、ペンシルバニア州立大学に異動した。そしてそこに新設された“Institute of Molecular Evolutionary Genetics”の所長になられたのである。1994年には学生だった Sudhir Kumar 氏および日本からポストドクで来ていた田村浩一郎氏と共同で“MEGA (Molecular Evolutionary Genetics Analysis)”という名称のソフトウェアパッケージを開発した (Kumar, Tamura, and Nei, 1994)。2000年には Kumar 氏と共著で“Molecular Evolution and Phylogenetics”を刊行された。本書はどちらも根井先生の学生だった大田竜也博士と竹崎直子博士の共訳で、『分子進化と分子系統学』というタイトルで2006年に培風館から刊行された。

その後は受賞や栄誉のラッシュとなった。1977年、すでに日本人類遺伝学会から大賞を受賞されていたが、1990年になって、日本遺伝学会から木原賞を受賞された。1997年には国際生物学賞を受賞されるとともに、米国科学アカデミーの会員に選出された。また2002年には母校である宮崎大学から名誉博士号を授与され、また American Genetic Association の会長となっている。2006年には米国の遺伝学会から、トーマス・ハント・モーガン・メダルを受賞された。そして2013年、京都賞を受賞されている。受賞金額が大きな賞であるとともに、根井先生が若い頃すごした京都という場所で受賞式が開催されたことで、喜びもひとしおだったのではなかろうか。なお、同年には“Mutation-Driven Evolution”を刊行されている。本書も、その後根井先生のポストドクだった鈴木善幸博士と野澤昌文博士によって共訳され、『突然変異主導進化論』というタイトルで丸善出版から2019年に刊行されている。

2014年に心筋梗塞で倒れたあとは、ペン



根井先生と2022年

シルバニア州立大学の教授職を退職され、その後はテンプル大学の教授という形で事実上自宅での生活をされていた。ダーウィンが自伝を刊行したのにならわれたのか、2020年には“My Life as Molecular Evolutionist”という自伝を刊行されている。ちょっと残念だったのは、本書で引用されている近隣結合法の論文のタイトルに誤りがあったことだ。「近隣結合法」は英語では“neighbor-joining method”としたのだが、本書ではなぜかハイフンが落ちている。

私は根井先生に招かれて、2022年の夏に米国の先生のご自宅を訪問した。写真はそのとき撮影されたものである。奥様や息子さん、学生さんも写っている。いろいろな話をしたが、結局私を招待したおもな理由は、蔵書の一部を譲りたいというものだった。たくさんの弟子がいる中で、思いがけない幸運だったが、しかし、貴重な根井先生の書籍なので、私物化するべきではないと考え、これらの書籍はすべて国立遺伝学研究所の遺伝学博物館に寄付した。うちわけは、100冊あまりの邦文書籍と150冊あまりの英文書籍である。

根井正利先生は、2023年の5月18日に永眠された。92歳だった。多数の業績をあげ、また多数の弟子を育てた根井先生は、幸福な人生を送られたと言えよう。

引用文献

- Kumar S., Tamura K. and Nei M. (1994) MEGA: molecular evolutionary genetics analysis software for microcomputers. *Bioinformatics*, vol. 10, pp. 189-191.

- Nei M. (1972) Genetic distance between populations. *American Naturalist*, vol. 106, pp. 238–292.
- Nei M. and Roychoudhury A. (1972) Gene Differences between Caucasian, Negro, and Japanese Populations. *Science*, vol. 177, pp. 434–436.
- Nei M. and Roychoudhury A. (1974) Genic variation within and between the three major races of man, Caucasoids, Negroids, and Mongoloids. *American Journal of Human Genetics*, vol. 26, pp. 421–443.
- Nei M. (1975) Molecular Population Genetics and Evolution. North-Holland.
- Nei M. (1987) Molecular Evolutionary Genetics. Columbia University Press.
- Nei M. and Kumar S. (2000) Molecular Evolution and Phylogenetics. Sinaur.
- Nei M. (2013) Mutation-Driven Evolution. Sinaur.
- Nei M. (2020) My Life as Molecular Evolutionist. Institute of Genomics and Evolutionary Medicine, Temple University Philadelphia, PA.
- Saitou N. and Nei M. (1987) The neighbor-joining method: a new method for constructing phylogenetic trees. *Molecular Biology and Evolution*, vol. 4, pp. 406–425.

惜 別

追悼 大坪久子シニア会員

大坪久子先生の思い出

本橋令子

大坪久子先生の訃報は2023年7月30日にもたらされました。7月23日に大坪栄一先生から久子さんの調子が悪いと電話があり、翌日月曜日の24日に、講義を済ませた後すぐに、東大病院へ同級生だった友人の瀧さんと向かいました。想像以上に小さくなった久子さんは薬が効いているのか眠っていたので、しばらく廊下で待つことにし、瀧さんと話をしながらぼうっと東大病院の廊下から夕方の木々が多いキャンパスを眺めていました。しばらくすると、息子さんが仕事帰りに様子を見に来て、夕飯が運ばれたこともあり、久子さんは起きました。私が病室の扉から顔出すと、久子さんはちょっと困ったような歯に噛んだ笑顔で、「瀧さんと来たの？」と聞かれたので、「うん」と答えました。肺に水が溜まっているので話すのが苦しそうで、話したいことはたくさんあったが、久子さんの様子を見るしかない状況でした。我々と話すときは、声を張ってしっかりと話そうとするので、よくいに息苦しそうに見え、早々に帰ることにしました。帰りますと声をかけ、扉のところから手を振ったら、手を振りかえしてくれた姿が最後に見た姿になりました。今でも、その姿が目に残っています。なんだか、「バイバイ」と言っているような印象さえ受けました。慌ただしい大学の一週間が過ぎ、週末を迎えた時に、久子さんが息を引き取ったと聞き、まるで母親を亡くしたような大きな悲しみ押しつぶされました。

私が久子さんに会ったのは、平成5年初夏でした。頑張って入学したとある博士課程から、どうしても植物のトランスポゾンの研究がしたくて、東京大学分子細胞生物学研究所の大坪研究室に移ろうと決心し、大坪研究室の扉を叩い

た時でした。この機会を逃したら、トランスポゾンの研究は一生できないかもしれないと思い、緊張して大坪研究室に入れてくださいとお願いに行ったら、大坪栄一先生は「月曜日から来たらいいよ」とあっさり、受け入れてくれ、「指導は久子ね。」と久子さんを紹介してくださいました。大坪栄一先生と久子さんは長くアメリカのストニーブルックで研究室を運営しており、「先生」と呼ぶのは教授の大坪栄一先生のみで、他の助教の関根先生（現在、立教大学教授）も関根さんと「さん」呼びで、久子さんもファーストネームで呼ぶというフランクな研究室でした。研究室はメリハリがあるというか、みんな家族のような印象で、とにかく研究室の滞在時間が長いのが特徴で、現在の大学の研究室とはかなり印象が違いました。

久子さんに、イネのトランスポゾンやレトロポゾンについて教わり、後輩たちと多くのレトロトランスポゾン、レトポゾン、トランスポゾンを発見し、分子生物学の技術をたくさん教わりました。久子さんはバーバラ マクリントックに憧れ、イネの可動遺伝子の研究を始めたと楽しそうに話をしてくれ、研究室にはバーバラ マクリントックに縁のあるニーナ フェドロフ博士が研究室に来たり、ウエスラー博士の学生が交換留学で所属するなど夢のような環境でした。日々の実験では、その当時、アイソトープを用いたアクリルアミドゲルでのシークエンスを行っており、ゲルの作り方から教わったのを覚えています。その後、シークエンサーを用いるようになり、私の実験を優先していたのかもしれませんが、久子さんが金曜日にシークエンサーを仕掛けて帰宅するのが、恒例になり、土曜日の朝に「もとはしさ～ん、シークエンサー片付けておいてくれるかしら。」と陽気な声で起こされるのが愉快的な思い出になっています。何を頼まれても嫌な気がしないのは、その10倍以上のものを常に与えられていたからだ

思います。とにかく、久子さんは陽気で、塞ぎ込んでいるような姿は思い出せません。久子さんが「本橋さん、女性は男性の倍働かないとダメなのよ。」と言う言葉にも悲壮感が含まれていないのが不思議でした。当時、言われた私も「なんだ、男性の2倍働けばいいだけか。」と軽い気持ちで受け止めていました。日頃、陽気な久子さんの姿と、小学校が終わって研究室に「ただいま。」と帰ってくる息子さんの姿を見て、女性でありながらアカデミアに残ることになんどの不安も抱きませんでした。久子さんはとても良いロールモデルだったのだと思います。

研究以外では、久子さんは料理がとても上手で、いろんな料理を学生に持ってきてくれたのを覚えています。博士論文の執筆で徹夜続きの年末に、あんこう鍋を作って来てくれて、修士論文を書いていた後輩たちと、生まれて初めてあんこう鍋を食べたと笑い合っていたのを思い出します。また、クリスマスにはシュトーレンというドイツ菓子を作って振る舞ってくれました。さらに、久子さんはジブリ映画が好きで、どのジブリ映画が好きだとか、漫画の「のだめカンタービレ」が面白いとか、研究以外の話もたくさんしました。

久子さんの学生へのケアは、学ぶべき部分がたくさんありました。学生が大坪栄一先生に叱られて落ち込んでいると、こっそりレストランや喫茶店に誘い出して、とりあえず学生の話聞いてくれ、さらに栄一先生が言わんとしていたことを分かりやすく解説してくれました。学生を救い出すタイミングが的確で、もうダメかもしれないと思う瞬間に救い出してくれました。



2009年 東京大学定年退職時のパーティー
中央左が大坪久子先生、右が大坪栄一先生

たぶん、多くの学生が久子さんのレスキューによって、卒業まで辿りつけたのだと思います。久子さんは、学生の表情をよく見ていて、何気ない映画や漫画の話も学生をリラックスさせたりするためだったのかもしれないと今更ながらに思います。大坪研究室は久子さんの采配によって絶妙なバランスで回っていたのだと思います。料理好きで、子育てもしっかり行い、実験も学生以上にこなし、常に3人以上の学生の指導を行うスーパーウーマンでありながら、バタバタ帰宅し水と一緒に制限酵素のチューブを流しによく浮かべているお茶目な一面もある笑顔が本当に素敵な先生でした。

久子さんは、東京大学を定年退職された後は日本大学に移られ、男女共同参画推進の活動に邁進していかれました。最初は、女子中高生の夏の学校での実験指導から始まり、学会での男女共同参画に関する講演、男女共同参加学協会連絡会への参加と活動の幅を広げて行かれ、久子さんの抱持ちのような形でそれらの活動に私も参加するようになりました。学会やシンポジウムで久子さんが講演した後、多くの女性研究者が泣きながら久子さんに過酷な現状を訴え、忙しいにもかかわらず丁寧に話を聞いている姿が印象的でした。日本の女性研究者の現状を世界に伝えないといけないという気持ちが強く、論文を書こうと誘われたときは少し驚きましたが、とてもいい経験になりました(1, 2)。久子さんが最初に投稿したNatureに論文がリジェクトされた時に落ち込んでいたので、短絡的ではありますが慰めようと「NatureがダメならScienceに投稿すればいいじゃないか」との私の提案を、そんな考え方もあるのね〜と笑って聞いてくれました。後日談として、Scienceに論文が掲載されたのは、自分の指導学生が「NatureがダメならScienceに投稿すればいいじゃないか」と言ったからだとかどこかのコラムに書いていて驚きました。空気を読まない、暴走気味な私の行動や発言を必ず一度は吸収して選択肢として考えてくれことには、感謝しかありません。

久子さんの男女共同参画推進の仕事は、沖縄のOISTや北海道大学など日本中を走り回るほどの展開になり、「アンコンシャスバイアス」の

概念を日本に紹介したのは大きな功績だと思います。コロナ禍では、オンラインでの講演が中心になったため、体調が多少悪くても講演ができると闘病中も講演を引き受けており、多くの人が久子さんが病気であることさえ気が付かなかったのではないかと思います。配信用のプレゼンが一気に録画できないほど体力を無くしていても、音声の切り貼りを瀧さんに教わりながら配信資料を作成し、この情熱はどこから湧いてくるのかと驚かされました。久子さんは亡くなる前日に、自分が引き受けた講演ができないと連絡をしたと言う話や学協会連絡会の大規模アンケート結果の英語化の手伝いを亡くなる直前まで行っていたと聞き、志半ばで無念だったのではないかと胸が痛くなります。

久子さんの功績はこの紙面で書ききれませんが、最後に、久子さんはガラスの天井を私のために破ってくれて、梯子をかけて、さあ、もとはしさん登りなさい！！とお尻を押してくれました。私は、『久子さんの教育と男女共同参画推進の成果物』であると思います。『久子さんの成果物』として、恥ずかしくないように残りの研究者人生を植物研究と男女共同参画推進のために使いたいと思います。大坪久子先生、長い間、どうもありがとうございました。どうか、ゆっくりとお休みください。先生が作った道は私たちが大切に守ります。

- 1) Homma MK, Motohashi R, Ohtsubo H: Maximizing the Potential of Scientists in Japan –promoting equal participation for women scientists through leadership development. *Gene to Cells*, 18(7): 529-532 (2013)
- 2) Homma MK, Motohashi R, Ohtsubo H: Japan's Lagging Gender Equality. *Science*, 340: 428-430 (2013)

大坪久子先生追悼文 (男女共同参画へのご貢献に関して)

高橋 文

大坪久子先生は、2023年7月30日に享年77歳にてご闘病の末、お亡くなりになりました。会員の皆様とともに、心からご冥福をお祈り致し

ます。大坪先生は、ご自身のキャリアを通して日本の研究現場における男女共同参画に言葉で尽くせないほどご貢献いただきました。学協会連絡会に加え、日本遺伝学会においても、長年にわたり男女共同参画推進のための活動を牽引してくださいました。ここに感謝と追悼の意を表して、生前の本学会へのご貢献について記します。

日本遺伝学会における男女共同参画推進特別幹事及び特別委員会は、2007年度に設置され、その年に学会として男女共同参画学協会連絡会に加盟しました。分子生物学会などで保育所設置などの活動をされてきていた大坪先生は、当初から遺伝学会での活動が軌道に乗るようご尽力下さいました。今でこそ多くの会員が、男女共同参画の重要性を認識していますが、当時は委員を承諾して下さる会員を探すのにも苦労されていました。僥倖ながら遺伝研の助手だった私も特別推進委員としてお声がけいただき、2023年度末までとなりますが長年委員を続けてきました。

大坪先生は、初代幹事に就任された松浦悦子先生（お茶の水女子大学教授（当時））とともに、次の年の名古屋大会（2008年9月）に第一回目の男女共同参画ワークショップを開催されました。あまり積極的でなかった男性会員へも毅然として、参加を呼びかけておられる姿を拝見して、私も主張する勇気をいただきました。この最初のワークショップでは、大会委員長でおられた森郁恵先生（名古屋大学教授（当時））がランチョンのためのお弁当をご準備下さり、当時の品川日出夫学会長にもご登壇いただいて盛況にスタートすることができました。それ以後、歴代の学会長の先生方も年々重要性をより重く受け止めて下さり、毎年大会で男女共同参画に関する様々なテーマでランチョンワークショップが開催されています。大坪先生は、男女共同参画推進に対して、常に大変強い意志と情熱を持っておられ、時に受けられる批判的・否定的な言動にもしっかりと向き合われる姿を拝見してきました。ある年、結構否定的な意見が出たワークショップの後で、大坪先生が「今回のワークショップでは、年配の男性教員の本音が出てくるようになったのが良かった。」と言

われていました。確かに真剣に考えようとする姿勢の第一歩だということだと納得しましたが、冷静に現状を分析されている様子を拝見して、物事の見方について多く学ばせていただきました。

その後2013年度から、篠原美紀先生（近畿大学教授）が担当幹事になられて、2019年度から荒木喜美先生（熊本大学教授）が加われ、現在は大坪先生の研究室にいらした一柳健司先生（名古屋大学教授）が委員長をされています。大坪先生は、この間ずっとご多忙な身にもかかわらず、大会ごとのランチョンワークショップなどで自らご登壇されたり、企画にご意見いただいたり、適任な講演者をご紹介下さったりと活動を牽引してくださいました。また、育児中であった私のような研究者には気さくに声をかけて下さり、大局的な視点からキャリアをどう考えていくべきか常に励ましてくださり、何度も背中を押される思いをしました。

大坪先生が男女共同参画連絡会の中で中心となってまとめられた「無意識のバイアス」^(注)についてのリーフレット^(注)を作成されたことは、大変大きな功績であり、先生抜きでは完成できな



写真：大坪久子先生，2009年5月東京大学定年退職記念パーティーにて（ご提供：本橋令子先生）

かったものと考えられます。無意識の固定観念の存在を十分認識したうえで意思決定をするべきだという主張を私も非常に強い説得力を持って受け止めました。リーフレットを手にとられた、多くの会員の心にも響いていると考えています。

残念ながら最後はご闘病の日々でありましたが、それでもワークショップや、若手雇用問題WGに積極的にご参加いただき、最後までご尽力を続けられた情熱に、私たち委員の多くが圧倒され深く感銘を受けました。上記無意識のバイアスについてのリーフレットの共同執筆者でおられる裏出令子先生（京都大学特任教授）には、2022年札幌大会の男女共同参画フォーラムにてご講演いただきました。実はその日、大坪先生は日にちを勘違いされていたために、オンラインでご参加いただけなかったことを「嘆いても仕方ないけど、もう歳よねえ」と、とても残念がっておられたというエピソードを一柳先生よりお聞きしています。

2023年度熊本大会でのワークショップには、多くの会員が参加する中で、大坪先生への黙禱が捧げられました。大坪先生が男女共同参画の活動を開始された2000年代初期とは、時代も大きく変わりました。まだ課題は多く残るものの時代変化の潮流を作られた功労者として、会員の心に残っていくと思います。私たちも大坪先生の遺志を継ぎ、優れた科学の芽を大切にしつつ、多様な人材が生きる研究現場をつくっていくことは、本学会の使命でもあると感じています。

末筆ながら改めて、大坪先生のご貢献に心から感謝しつつ、先生の安らかなご冥福をお祈りいたします。

(注)「無意識のバイアス - Unconscious Bias - を知っていますか？」男女共同参画学協会連絡会著 (2017)

https://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2019/UnconsciousBias_leafflet.pdf

惜 別

追悼 中田篤男名誉会員

中田先生、ありがとうございました

山田雅巳

スマホの連絡先に生年月日を入れておくと、カレンダーにその人の誕生日が年齢とともに表示される。昨年12月5日、Google calendarで予定を確認していた私は、12月8日の-中田篤男さんの94歳の誕生日です-という文字を目にしていた。「中田先生、94か〜」とつぶやきながら、「もう、手紙も間に合わんし、今年はサプライズで電話してみようかな…」などと考えていた。しばらくして、持っていたスマホが鳴った。石野さんからだった。『もしもし』『山田さん、中田先生が亡くなりはったんや。今日がお通夜や。』『えっ、えー？、えーっ』別の意味でサプライズの電話だった。4年前に先生の90歳の誕生日に集まって新大阪でお祝いしたことを思い出していた。先生が杖を突きながら現れたので驚いたが、「いつも使っているわけではなく、ゴルフはハーフラウンドを回れている、車の運転もしている」と言われていた。2019年のことだった。翌年に始まったコロナ禍で人と会う機会が減り、CRISPRによるゲノム編集のノーベル賞受賞にテレビでコメントするお姿をお見掛けしたことはあったが、直接お会いしたのはその時が最後になった。

私が中田篤男先生にお世話になったのは、大阪大学医学研究科博士後期課程を、微生物病研究所（微研）化学療法部門（当時）で過ごした4年間（1986年4月～1990年3月）である。当時の研究室には、助手の品川日出夫先生（本会元会長）と助手2年目だった牧野耕三先生（2015年9月逝去）、医科学修士2年の岩崎さん（本会現会長）と、出向4年目の宝酒造（当時）の石野さんらがいた。会長の岩崎さんが、中田先生の追悼文を石野さんと私に依頼したのはこのような背景がある。

中田先生に初めてお会いしたのは、私が薬学研究科修士2年の5月4日（土）の午後だった。当時、5月4日はまだ休日ではなく、土曜日は午前中だけが勤務時間の半ドンだった。薬学部の修士課程を辞めて就職していた同級生が遊びに来て、私の進路を聞くので、「微研の博士課程に進学しようと思う」と話したら「今から挨拶に行こう！」と言われた。彼女の勢いに背中を押されて、図書館で「要覧」を見て、微研でバクテリアやDNAを扱っている研究室をいくつか書き留めて薬学の建物を出た。6階の研究室の重いドアを開けて入っていくと、ちょうど話を終えて出ていく男性とすれ違った。出迎えてくれた先生に『角永先生ですか？』と尋ねると、『角永先生なら今出て行った人じゃよ。私は中田です。』と言われた。石野さんが書かれているような事情で、当時の化学療法部門の教授は角永先生（1988年9月逝去）だった。少々混乱したが、追いかけることはせず、中田先生にお話を聞くことにした。遺伝子を調べるような研究を博士課程でやらせてほしいという趣旨を手短に話すと、ホワイトボードを使って慣れた様子で、タンパク質の働きを調べることに、遺伝子をクローニングする手順などを話された。真面目な先生、きちんと指導してくれそう、という印象を持った。当時、博士課程で研究室を変えることに迷いがあった私は、先生の質問にも口ごもりがちで、同行した同級生が代わりにはきはきと答え、それを内心はらはらしながら見ていた。お暇する時間になって、先生に「今度来るときは、事前に連絡するように。」と言われて、微研を後にした。中田先生のお話を聞いて、自分がやりたいことができそうと思ったのか、緊張で疲れたからか、ほかの候補研究室は訪問しなかった。時期が来て受験票を取り寄せたところ、「博士課程は受験する研究室に連絡して受験の許可を取るように。」と書いてあった。今度は事前に電話して受験する旨を伝えに行こうとしたと

ころ、中田先生の応答が5月の時と何か違った。遠回しに断られているようなので困り果てた。3人くらいの方にお世話になり、紆余曲折を経て受験が叶い、試験には合格した。1986年は男女雇用機会均等法が施行された年なのだが、女性就職の前に、大学院の受験すらままならない時代だった。大卒女子は3年くらいで「寿退社」の「腰掛け」が当たり前で、仕事を続けようとする女性を企業は敬遠した。そもそも、今のように自分で就活をするのではなく、先生（教授）が就職先を紹介するシステムだったので、女子が修士課程に行こうとすると、先生に「就職無いで」、続けて「公務員試験を受けなさい」と言われていた。中田先生のところでも、私はできれば来てほしくない存在だったのである。

そうして、4月から博士課程が始まった。角永先生は兼任が解かれて発がん遺伝子部門のみの教授になり、化学療法部門の教授は空席になっていた。（その年の9月に中田先生が教授になり、品川先生が助教授になり、牧野さんは発がん遺伝子部門から化学療法部門に戻った。）いただいたテーマは、リン酸レギュロンを構成する遺伝子の内、*phoB* と *phoR* の既存の変異体の変異箇所を決定し、遺伝子産物の機能ドメインを推察することだった。プラスミドの精製（当時キットはなく、手作りの試薬を使った）、菌の transformation（カルシウム法である）、制限酵素処理、アガロースゲル電気泳動（Mupid™ は当時からあった）などの基本的な操作を、私は中田先生から直々に教わった。コロニーに試薬をスプレーするとアルカリホスファターゼ（AP）を産生する株のみが茶色く染まるという表現型の検出方法も教わった。「チューブに順に試薬を入れていくときは、入れたら1つずらす」というような、ごくごく基本的なことまで丁寧に指導された。『そんなことをしなくても自分で入れたかどうかくらいわかる』と反論する人が過去にいたが、そういう考え方は間違いだと、昔のエピソード付きで教えてくれた。自分がうっかりミスをして、リカバーできるようにしておくことが実験の基本で、そういうことをしない人の実験結果は信用できないとも言われていた。

大腸菌の全ゲノム配列が決定される10年くらい前で、PCR も普及していなかった当時は、表現型の違いから変異株を分離し、一方で、ゲノム DNA を制限酵素で処理してベクターにつないだライブラリを作って、そこから変異株の表現型を相補するクローンを選別して、挿入断片の塩基配列を調べて、ORF を探して遺伝子を特定するという手順を踏んでいた。*phoB* と *phoR* はオペロンを形成していて、*EcoRI* で切ると両方を含む断片ができるので、*phoR* の変異体は *phoB* の変異株を相補するクローンとして得るという戦略でやりなさいと言われた。いただいたテーマは、今にして思えば、当時の分子生物学初心者にとってつけのものだった。しかし、単に DNA 断片とベクターをつなぐこともしたことがなかった学生にとって、いきなりライブラリを作るのは少々ハードルの高い操作だった。何度やっても、出てくるコロニーは少なく、無駄に DNA だけが減っていった。変異体の数（*phoB* が4つ、*phoR* が6つ）だけライブラリが作れて、変異体のクローニングができた頃には次の春が来ていた。いよいよ、変異の場所を調べることになったとき、中田先生は「この子にシークエンスのやり方を教えてやってくれ」と牧野さんに頼んでくれた。

先生の研究に対する姿勢、情熱については、石野さんが詳しく書かれていると思うので、私は言葉をとても大切にされていたことを書こうと思う。学会の要旨が修正で真っ赤になったり、発表練習で何度もダメだしされたりということは、他の研究室でも珍しくない光景だと思うが、ゼミの長さはたぶん特別だったように思う。土曜午前10時開始のゼミは、研究の進捗報告と文献紹介が交互に実施されていたように思う。どちらも、内容の理解というよりは先生による「言葉遣いの訂正」に終始していた。もちろん、理解が足りないから説明の言葉が適切でないわけで、必要な指摘ではあるが、絞られるとお昼を挟んで午後も続くことがあった。さらに、普段の会話でも、何かしてもらったときに「すみません」と言ってしまうと、「すみませんではなく『ありがとうございます』と一言いください。」と言われる。3時のお茶を入れてくれた人が「お茶入りましたよ〜」と言って、みんながぞろぞ

ろお茶部屋に入ってくると「お茶は勝手に入らんよ。入れてくれた人がいるからここにあるんじゃないよ。」と、黙って飲んでいられる我々に、入れてくれた人への感謝を促す。そのほか、テレビで流行っている言い回しを使うとにらまれたり、最近巷で耳にするようになった文法的におかしな言葉を指摘したりと、とにかく頻繁に、様々な言葉にダメ出しをされていた。だから、いまでも「中田先生なら直すよね」とか「こんな文章書いたら、中田先生にしばらく説教されるよね」という話をすることがある。

私は毎日先生とお昼をご一緒していた。先生は愛妻弁当、私は（いい年をして）母に作ってもらったお弁当だった。お昼の話題は多岐にわたり、研究室に昔居た学生の話、ほかの研究室の噂話、先生が微研に来た頃の話、そして「僕がアメリカにいた頃...」で始まる留学時代の話。先生がアメリカと言われるときは必ず英語のように「メ」にアクセントを置く。プラスミドはプラズミッド、ピザはピッツァ、シーはスィーと英語っぽく発音されていた。先生が過ごされた旧制中学時代は戦時中で、敵国語である英語の授業は行われていなかったと聞く。発音のこだわりはそれと関係がありそうに思えた。私の母方の祖母が、先生のご出身の山口県周防大島の隣の平郡島の出身だったことを話すと、大島時代のお話が増えた。戦後に通われた柳井高校は本州にあるので、朝早く暗いうちから船を出してもらって、船の中で寝ている間に港に着いたという話も聞いた。先生は釣りもお上手で、舟をこぎながら釣りができると、岩崎さんが言っていた。若いころは野球をされていたそうで、その頃のようにフライが取れないという理由で、研究室対抗ソフトボール大会には出てくれなかった。

お昼のリラックスした時間でも楽しい話ばかりではなかった。「断るつもりじゃったけど、泣きそうな声で『お願いします』と電話してきたから、仕方なく取ったんじゃないよ」「僕はやめておこうと言ったんじゃないが、品川君が『まあ、取ってやりましょうや』」というので、取ることにしたんじゃないよ。だからあんたは品川君に足を向けて寝られんよ」というようなことを、何かのタイミングで思い出したように言われることが何

度もあった。極めつけは「一緒に挨拶に来ていた子の方がよかった。あの子が来るのかと思ってたのに」。まだ修士課程を1年残している学生の私が、卒業した彼女のように自由にモノが言えないことをわかってくれない発言に腹が立ったが、我慢して聞いていた。一方、そういうことをちょくちょく言われると、辞めさせようとしているのかもしれないという懸念がわいてきた。それで「データが出なかったらどこかで見切りをつけられるのではないかと」と、石野さんに聞いてみたことがあった。石野さんは「そ

1989年5月 研究室旅行 和歌山県白浜（還暦をお祝いで）



旅館で撮った中田先生の写真

赤いちゃんちゃんこの代わりにえんじ色のベストをプレゼントした。



白浜の海岸で集合写真

後列左から2人目筆者、2人置いて中田先生、岩崎さん、品川先生。

前列右から2人目勝野さん（後出）、笠原さん（後出）、牧野さん。

れはない」ときっぱり、学生は自分から辞めると言わなければ放り出されることはないとのこと。辞めなければ学位が取れる、学位が取れたら何とかなると信じて毎日片道1時間40分を通っていた。卒業の日に中田先生は私に「君はどんなに厳しいことを言っても、へこたれなかったね」と言われた。これが先生にいただいた唯一の誉め言葉だったように思う。先生は、「社会に出たら今よりもっと大変な目に合うだろうから、鍛えるつもりであえて厳しくした」と言われていた。その言葉を素直に受け止めれば、社会に出てから挫折しないようにという配慮だから、研究者を続けなさいというメッセージである。私が、研究者のはしくれとして35年ほど過ごして来られたのも、中田先生に4年間鍛えられたお蔭だろう。ただ、あの頃よりもっと大変な目というのはその後の人生でちょっと思い出せない。

中田先生の訃報を受けて、私から何人かの人に連絡をした。電話をくれた人もいたし、直接会って伝えた人もいる。その流れで当時のことを思い出し、昔話に花が咲き、先生が亡くなったというのになぜか会話は笑いに包まれた。当時、絶対におかしいと思っていたけど言えなかったことなども少なくないが、今となっては誰も腹を立ててはいない。中田先生の薫陶を受けた我々は、これから時々、自分が先生に言われたことを、知らず知らずのうちに学生に向かって繰り返し、先生を思い出しては昔話で盛り上がるのだらうと思う。

中田篤男先生との思い出

石野良純

昨年末に恩師である中田篤男先生ご逝去の知らせが入り、気持ちの整理がつかずに動揺したままお通夜の儀に駆けつけました。中田篤男先生の追悼文を書くことになり、誠に辛く寂しい思いですが、中田研出身者の一人として、中田先生と過ごさせていただいた日々を綴りたいと思います。

私は、阪大薬学部で修士課程まで終え、宝酒造（現タカラバイオ）に就職しました。当時は

遺伝子工学的手法で有用物質を生産する開発研究が注目されていました。宝酒造では制限酵素を製品化して販売し始めた頃でしたが、自社でも遺伝子工学を用いた有用物質生産技術開発を目指したため、私は入社後間もなく、大腸菌発現系として有望な誘導型の強力プロモーターを所有しておられた阪大微研の化学療法部門（中田研）へ出向して遺伝子工学を学ぶ機会を得ました。研究生として中田研究室に在籍することになり、引き続き阪大吹田キャンパスに通学しました。当時は中田先生と、助手の品川日出夫先生、技官の雨村光子さん、そして博士課程3年次の牧野耕三さんの4人で精力的に大腸菌のリン酸レギュロンの研究を進めておられ、少数精鋭で密度の濃い研究室でした。就職はしたものの大学のアカデミズムに未練を残していた私は、引き続き阪大に通うことが本当に嬉しくて、毎日誰よりも早く研究室に行き鍵を開けました。その後に中田先生が登校して来られ、まず器具洗浄室で実験に使う純水装置と前日から動かしていたメスピペット洗浄のお世話をされることが日課でした。厳しい姿勢で実験に取り組み、いろいろな意見を自由に言い合いながら何よりも研究を一番に考えるという雰囲気化学療法部門で、私は一から分子遺伝学を学びました。毎日午後に皆が手を止めて集まるお茶の時間があり、先生方からいろいろお話を伺いました。中田先生はご自身で手を動かしておられましたので、細かな実験のことも教えていただきました。海外留学時代のこと、ご家族のことなどいろいろ聞かせていただきました。

私は、大腸菌のDNAリガーゼをコードする*lig* 遺伝子をクローニングして、多量発現系を構築することに成功したことをまとめて、学位論文を仕上げました（写真1）。その後で中田先生のライフワークテーマであった、アルカリホスファターゼ（AP）のアイソザイム変換機構の研究に携わらせていただきました。APはホモ2量体で働く酵素で、ポリペプチド鎖が細胞質で産生されたあとペリプラズムに分泌されるのですが、そこでN-末端のアルギニンが切断されない1、片方のサブユニットだけ切断された2、そして両方のサブユニットとも切断された3の3種類のアイソザイムが生成されます。何故この



写真1 筆者が学位を取った時の記念写真
中田研究室にて (1986)

ようなことが起きるのかわかりません。中田先生はAP-1しか生成されない大腸菌変異体を分離され、*iap*⁻と名付けられました。このアイソザイム変換の責任遺伝子の正体を解明するのが私の課題でした。*iap* 遺伝子を含むDNA断片の塩基配列を解読するため、そのDNAを種々の制限酵素でさらに細断してM13にサブクロニングし、宝酒造から市販されていたシーケンスキットを使って解読していきました。当時は大腸菌のKlenow酵素を用いてジデオキシ反応をしていましたので、鋳型DNAの二次構造に弱く解読不能箇所が頻繁に出てきました。その場合は制限酵素を換えて異なる断片をクロニングし直し、再度解読を試みるということを繰り返しました。また一つのサンプルで解読できる配列は350塩基程度でしたので、解読した配列を並べて同じ配列が重なっている部分を頼りに配列を繋ぎ合わせて長い配列にする作業が必要でした。このように苦労しながら*iap* 遺伝子を含むDNAとして取得された1.7 kbpの全長領域について両方向のDNA鎖それぞれを独立に解読作業した後、最後に両鎖を合わせてA-T、G-Cの相補性が100%合致するまで続けました。得られたオートラジオグラムのラダーバンドを一本ずつ目で読んで、A、G、C、Tを一つずつコンピューターに打ち込みましたが、この作業を中田先生と一緒にやってくださり、二人でコンピューターの前に並んで、私がラダーバンドを読

み上げ、中田先生が打ち込んでくださいました。その光景は今でもはっきり頭の中に浮かんできます。こうして、現在ゲノム編集で有名になっているCRISPRが発見されました。独特の繰り返し配列であったため、何か生物学的に意味を持っているだろうと想像されましたが、当時の情報ではまったくわかりませんでしたし、実際にその機能が解明されるまでにはその後30年かかりました。

私が化学療法部門に入室したのは、新教授として角永武夫先生が就任された時でした。その後、微研の中に新しく設立された発癌遺伝子部門の教授として角永先生が移られたことにより、化学療法部門の教授選考が再度行われました。その結果、中田先生が教授になられましたが、私はその間の4年間(1983-1986)を中田先生と共に過ごさせていただきました。山田さんの追悼文で紹介されていると思いますが、1986年の忘年会は中田先生の教授就任お祝い会として、いつものお茶の部屋で楽しく騒いだことがたいへん懐かしいです(写真2)。

私の在籍した期間は、中田先生にとってはたいへん難しい時期であったかと思いますが、リン酸レギュロンの分子機構の全体像の解明を目指して研究に集中され、次々といい論文を発表されました。たいへん厳しい先生でしたので、脱落した大学院生も何人かいましたが、私は必死で頑張って何とか先生に付いていくと、実際には優しく面倒見のいい中田先生のお人柄を見せていただけました。中田先生はスポーツもお



写真2 中田先生教授就任お祝い会
研究室にて (1986)

中田先生を囲んで、後列左から河本くん、岩崎くん(現本学会長)、筆者、小原くん、雨村さん、山田さん

好きで、特にご自分ではゴルフをやられていました。微研の裏に手製でケージを造られていて、息抜きの時にはそこでクラブを振られるのを、私は付いて行って横で見ていたのも憶えています。また息子さんが大学でアメフトをやっておられ、リーグ戦の試合に何度か連れて行っていただいて、二人でスタンドに並んで応援しました。各プレーについて解説してくださる時の中田先生は本当に嬉しそうで、とても楽しかった思い出です。1986年6月にフランスのコンカースで開催された国際会議に中田先生と品川先生が招待されて、牧野さん、雨村さんと5人で参加しました。私にとって初めて日本の外に出た旅行で、右も左もわからないまま付いていったという感じでしたが、国際会議がどのように開催されるのかを経験することができましたし、中田先生が*iap*の研究を始められた留学先のブラウン大学Rothman教授をはじめ、研究室のゼミで論文紹介されていた研究者の方々に直接会うことができ、研究に国境が無いことを実感として持てた経験でした。

中田先生、品川先生、牧野さん、雨村さんといっしょに化学療法部門で過ごした日々は、ほんとうに濃密で、いろいろな思い出と共に、その後の私の研究者としての人生に大きく影響しています。私の在籍最終年には山田雅巳さん（防衛大教授）や岩崎博史くん（東工大教授、本会現会長）をはじめ大学院生が増えて賑やかになっていきました。中田先生は1993年に阪大をご定年退官された後、研究室は品川教授へと引き継がれ、遺伝子生物学部門へ名称変更されて、テーマもゲノム安定性維持機構へ変わって行きました。中田先生は福山大学の教授になられ、単身福山へ行かれました。私は中田研究室を見せていただきに、福山へ行ったこともありましたが、中田先生は週末には大阪に戻られて、毎土曜日に行われていた品川研究室のジャーナルゼミに出席されておられました。私も当時は阪大のすぐ近くの生物分子工学研究所に所属しておりましたので、中田先生といっしょに品川研ゼミに毎週参加しました。福山大学では熱心に講義をされていたと想像します。おそらくその内容をまとめられたものと思いますが、「回想

分子生物学」とご自分で名付けられた160ページの冊子を作成され、送っていただきました。その冊子は今も手元に持っています。

コロナ感染が始まる直前の2019年12月8日（中田先生のお誕生日）にお会いした時が最後になってしまいました（写真3）。中田先生と一緒に過ごさせていただきました阪大微研本館の6階の研究室は、私にとっては帰省先のような場所でしたが、今はもうありません。あの場所から巣立ち、その後九大教授となって21年間研究室を運営させていただき、昨年3月に無事定年退職することができました。何も本質がわかっていないのに気楽なことばかり言って、まったく頼りなかった私が、研究室の主宰者として恥じない運営と業績を示すことができたことは、中田先生が本気でご指導くださったおかげであることを、中田先生に直接申し上げる前にお会いできなくなってしまったことを悔やんでいます。これからは心の中で、中田先生にご指導いただきました多くの思い出と共に、自分の研究者人生を振り返る日々を過ごすことになりますが、まだ解明したい課題をいくつも残しており、真剣に科学に向き合うことで、次の世代に対して少しでも貢献できるように生かしていきたいと思います。

中田先生のご冥福をこころよりお祈り申し上げます。



写真3 中田先生を囲む食事会

新大阪のレストランにて（2019）

左から中田先生、筆者、勝野さん（秘書）、笠原さん（博士課程）、山田さん（博士課程）

日本遺伝学会木原賞および奨励賞候補者推薦のお願い

下記の規程に添って2024年度木原賞および奨励賞候補者推薦をお願いします。

【推薦書作成要領】

推薦書は遺伝学会ホームページからダウンロードください。いずれも用紙はA4判を使用して下さい。
(木原賞) 推薦書、業績リストを別紙にて作成し(主要な論文5編に丸印を付ける。)うち主要な論文5編各3部と郵送して下さい。また、候補者推薦書 (Word)、業績リスト (Word)、論文 (PDF) をメールの添付にて事務局にお送りください。

(奨励賞) 1. 推薦書、業績リストを別紙にて作成し、(主要な論文2編に丸印を付ける。)うち主要な論文2編各3部と郵送して下さい。
2. 自薦の場合も同様式に従って作成して下さい。
(2010年から年齢制限はなくなりました) また、候補者推薦書 (Word)、業績リスト (Word)、論文 (PDF) をメールの添付にて事務局にお送りください。

【提出期限】

2024年5月29日 (水) 必着

提出先: 〒411-8540 三島市谷田1111 国立遺伝学研究所内
日本遺伝学会 Tel & Fax 055-981-6736

日本遺伝学会会長 岩崎 博史

電子ファイル送付先: Email: japgenet@nig.ac.jp

* なお、木原賞および奨励賞の受賞者には当学会誌 Genes & Genetic Systems に英文総説の執筆と、その年に開催されます大会で受賞記念講演をお願いしております。

公益財団法人遺伝学普及会 学会賞および奨励賞に関する規定 (抜粋)

第1条 (目的)

遺伝学の進歩を促し、すぐれた研究業績を一般に知らせるために学会賞および奨励賞を設定する。

第2条 (賞の種類)

1. 日本遺伝学会木原賞
遺伝学の分野ですぐれた業績をあげた者 (原則として会員) に授与する。
2. 日本遺伝学会奨励賞
遺伝学の特定分野ですぐれた研究を活発に行い、将来の成果が期待される会員に授与する。

第3条 (賞の内容)

1. 日本遺伝学会木原賞
賞状、メダルおよび副賞としての賞金20万円からなる。
2. 日本遺伝学会奨励賞
賞状および副賞としての賞金5万円からなる。
尚、賞状の名義 (発行者) は「日本遺伝学会会長名」とする。

第4条 (賞の選考)

賞の存在が有益であるためには、公正適切な選考を行なうことが不可欠である。これを考慮して選考委員会の規程および選考方法を定めるものとする。

1. 選考委員会

選考委員は、普通会員、シニア普通会員、シニア永年会員、学生会員を対象として評議委員会により選挙で選出された評議委員より3名、評議委員以外の会員より3名とし、これに会長を加えた7名が選考委員会を構成する。会長以外の選考委員は任期を2年とし、連続して2期 (4年) をこえ選考委員としてとどまることはできない。選考委員の委員長は会長がつとめるものとする。選考委員は財団理事会の承認を得るものとする。

2. 選考方法

会員から推薦された候補者について選考委員が慎重に審査を行い、受賞者を決定した上で評議委員会及び財団理事会の承認を得るものとする。日本遺伝学会木原賞受賞者については原則として各年1名とするが、適当な候補者がいない場合は授賞は行なわないものとする。日本遺伝学会奨励賞については各年3名以内を選ぶものとする。

附 則

- | | |
|-------------|---|
| 昭和57年11月20日 | 日本遺伝学会総会承認 |
| 昭和60年10月14日 | 一部改正 |
| 昭和63年2月6日 | 一部改正 |
| 1989年10月14日 | 一部改正 日本遺伝学会総会承認 |
| 1992年10月23日 | 一部改正 |
| 2005年4月4日 | 一部改正 〈選挙方法〉および〈補足〉 |
| 2009年9月17日 | 一部改正 日本遺伝学会総会承認 |
| 2016年5月16日 | この規程は、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律に定める公益法人の変更認定申請に基づいて、定款の変更が成された日から施行する。 |
| 2019年9月12日 | 一部改正 〈選考委員会〉 |
| 2021年11月2日 | 一部改正 (学会賞および奨励賞に関する規定) |
| 2022年9月16日 | 一部改正 第4条 (賞の選考) |

◆ 会 員 異 動 ◆

新入会・再入会

菊 池 浩 二	熊本大学発生医学研究所 染色体制御分野
吉 村 早 織	熊本大学発生医学研究所 染色体制御分野
阿 部 洋 典	熊本大学発生医学研究所 染色体制御分野
知 久 彩 楓	総合研究大学院大学 先端科学研究科 生命共生体進化学専攻
西 嶋 遼	福井県立大学
笹 本 悠 真	京都産業大学 生命科学研究科 集団遺伝学研究室
原 岡 郁 弥	広島大学院統合生命科学研究科統合生命科学専攻数理生命科学プログラム
小 川 佳 孝	名古屋大学 大学院理学研究科 理学専攻 分子修飾制御学グループ
中 西 健 悟	福井大学大学院工学研究科 生物化学研究室
待 井 長 敏	東京工業大学生命理工学院
麻 裕 毅	北海道大学大学院農学院植物遺伝資源学研究室
佐 野 利 恵	群馬大学大学院医学系研究科法医学講座
笹 田 健 太	近畿大学農学部生物機能科学科
下 向 結 貴	名古屋大学生命農学研究科ゲノム・エピゲノムダイナミクス研究室
野 田 大 地	熊本大学 生命資源研究・支援センター 生殖機能学分野
中 岡 博 史	公益財団法人佐々木研究所 腫瘍ゲノム研究部
篠 原 日 菜	熊本大学生命資源研究支援センター
平 歩 夢	熊本大学・生命資源研究支援センター・生殖機能学分野
田 中 佑 佳	福岡女子大学
大村谷 昌 樹	兵庫医科大学 医学部 遺伝学講座
小 林 壮 生	福井県立大学大学院生物資源学研究科生物資源学専攻
横 井 雅 幸	神戸大学バイオシグナル総合研究センター
陳 文 婷	兵庫医科大学 医学部 遺伝学講座
Duri Tahala	熊本大学・生命資源研究支援センター
土 屋 唯 菜	東京工科大学分子生物学研究室
松 谷 咲 采	東京工科大学分子生物学研究室
池 田 琉 那	熊本大学 薬学教育部 疾患モデル学分野
小 野 華 歌	熊本大学 理学部
萩 原 翠唯那	東京都立大学理学研究科生命科学専攻
GE ZHIYU	北海道大学生命科学院生命科学専攻
SUN XIN	北海道大学生命科学院形態機能学 III
孫 星 宇	北海道大学生命科学院
荒 木 優 衣	早稲田大学 先進理工学研究科 応用化学専攻 梅野研究室
今 坂 舞	兵庫医科大学 医学部 遺伝学
田 中 琴 葉	早稲田大学先進理工学研究科応用化学専攻梅野研究室

安藤大翔	早稲田大学大学院 先進理工学研究科 応用化学専攻 梅野研究室
古園英嗣	神戸大学大学院理学研究科生物学専攻 バイオシグナル総合研究センター 5F 菅澤研究室
西村香里	京都工芸繊維大学 ショウジョウバエ遺伝資源センター
丸山慶一郎	早稲田大学先進理工学研究科応用化学専攻木野・梅野研究室
早川葵咲	早稲田大学大学院先進理工学研究科応用化学専攻応用生物化学部門梅野研究室
金綱真作	早稲田大学大学院先進理工学研究科応用化学専攻梅野研究室
清水凌	熊本大学医学教育部
新井雄貴	埼玉大学大学院理工学研究科生命科学専攻生体制御学 PG 遺伝学研究室
加藤涼大	早稲田大学大学院先進理工学研究科応用化学専攻
本田晃誠	広島大学統合生命科学研究科
中尾聡宏	熊本大学生命資源研究・支援センター
竹内颯	北海道大学 大学院環境科学院
大畑樹也	国立大学法人 浜松医科大学 医学部 分子生物学講座
石原颯人	東京農業大学大学院バイオサイエンス専攻細胞ゲノム生物研究室
米盛匠海	熊本大学
古閑礼涼	熊本大学生命資源研究・支援センター 資源開発分野
増田光一郎	東京農業大学大学院 生命科学研究科 バイオサイエンス専攻
川上哲平	東京農業大学大学院 生命科学研究科 バイオサイエンス専攻
若杉理乃	熊本大学 生命資源研究・支援センター 資源開発分野
山口千裕	東京農業大学大学院 生命科学研究科 バイオサイエンス専攻
柴田雪花	鹿児島大学大学院農林水産学研究科
津波古遥希	熊本大学大学院薬学教育部 遺伝子機能応用学分野

(連絡先自宅のため不掲載)

木村将成, 尾脇あいみ, 東出望花, 五十嵐俊輔, 神野奈穂, 神崎ひろ, 吉田伶衣亜, 玉川克典, 張吉麗, 塚原大護, 高橋直生, 市田まなみ, 佐藤大典, 内田友夏, 山村遥, 酒見樹, 倉澤光, 松川佳奈, 采女優太, 吉村慧, 古川研人, 山口颯太, 佐竹由名, 後藤田想, 八木優美香, 三宅拓也, 佐藤傑, 堀内凌太, ジョナサンマイケル, 矢内祐希, 太田哲人, 井上瑞貴, 久原彩花, 吉田瑞希, 田中尚人, 麦田友佳, 森田昂大, 野寄拓海, 橋本彩, 川並清華, 尾尻龍星, 國富太郎, 大原隆人, 亀田淳生, 川西直希, 三浦清武, 西山典秀, 竹村悠太

退会

大平恵里花, 宇井彩子, 牧野愛子, 湯木就久, 大平純之, 稲井琴梨, 澁谷仁寿, 高添清登, 滝澤紘樹, 井手翼, 植田泰地, 秋山昌広, 田中若奈, 佐藤夕希, 北元優梨, 島田颯, 寺西宏顕, 副島顕子, 本村晴佳, 宮内翼, 本橋直大, 戸田美波子, 田中滉起, 山崎のどか, 古賀章彦, 上田聖, 上岡瑠奈, 八尾晃史, 服田昌之, 庄司日和, 森山龍希, 比留木成美, 金井雄樹

訃報

坂口文吾 (名誉会員), 根井正利 (名誉会員), 大坪久子 (シニア会員), 中田篤男 (名誉会員)
謹んで、哀悼の意を捧げます。

寄贈図書／交換図書

科学	Vol. 93	No. 5-12	(2023)
	Vol. 94	No. 1-3	(2024)
統計数理	Vol. 71	No. 2	(2023)
CHINESE QINGHAI JOURNAL OF ANIMAL AND VETERINARY SCIENCES	Vol. 52	No. 6	(2022)
	Vol. 53	No. 1-2	(2023)

(公財) 遺伝学普及会所属日本遺伝学会運営規則

公益財団法人遺伝学普及会（以下財団という）定款第38条、及び公益財団法人遺伝学普及会所属研究団体等に関する規程に基づき、当財団に所属することが認められた日本遺伝学会の運営については以下の通りとする。

- 第1条 所属団体としての名称は日本遺伝学会（以下本会という）と称する。
- 第2条 本会は遺伝に関する研究を奨め、その知識の普及を計ることを目的とする。
- 第3条 本会に入会しようとするものは学会ホームページから財団事務局に申し込む。
- 第4条 本会会員は普通会員、シニア普通会員、シニア永年会員、学生会員、教育会員、機関会員、賛助会員および名誉会員とする。ただし、年会費滞納が当該年度を超えて1年以上におよぶものは会員資格を停止する。
- 1) 普通会員は年会費10,000円を納める。
 - 2) シニア普通会員は、定年退職して常勤職でないことを申し出た者とする。以降の年会費6,000円を納める。会長および評議委員の被選挙権は有しない。
 - 3) シニア永年会員は、当学会に5年以上在籍する65歳以上の普通会員もしくはシニア普通会員が、初回のみ30,000円の永年会費を納入して資格変更でき、以降の会費および大会参加費の納入は免除される。会長および評議委員の被選挙権は有しない。
 - 4) 学生会員は、在学証明書またはそれに代わるものを提出することで、初年度の年会費を免除し、2年目以降は3,000円を納める。
 - 5) 教育会員は、小・中・高等学校等の教育機関の教員を対象とし、年会費2,000円を前納する。会長および評議委員の被選挙権は有しない。
 - 6) 機関会員は15,000円を、賛助会員は1口（20,000円）以上を納める。
 - 7) 普通会員、シニア普通会員、学生会員および教育会員が休職および海外留学をする期間の休会を申し出たときは、その期間中の年会費を免除する。
- 第5条 本会は次の者を財団理事会の決議により名誉会員の称号、あるいは特別功労賞を授与することができる。本会に功労のあった者、外国の卓越した遺伝学者。
- 第6条 本会は隔月1回 Genes & Genetic Systems を発行する。
- 第7条 本会は毎年1回大会を開く。大会は総会と講演会とに分け、総会では会務の報告、規則の改正、運営委員候補者の選挙および他の議事を行い、講演会では普通会員、シニア普通会員、シニア永年会員、学生会員、教育会員および名誉会員の研究発表をする。
- 大会に関する世話は大会委員若干名によって行い、大会委員長は財団理事会の承認を得て会長が委嘱する。大会は臨時に開くことがある。
- 第8条 本会は各地に談話会をおくことができる。
- 第9条 本会を運営するため運営委員として会長1名、幹事若干名、会計監査2名の役員、および評議委員若干名をおく。以下の手順で選出された運営委員候補者および評議委員候補者は全て財団理事会の承認を得るものとする。
- 1) 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
 - 2) 会長は、評議委員が普通会員および学生会員の中から選出した複数の候補者から、普通会員、シニア普通会員、シニア永年会員、学生会員による直接選挙によって選出される。
 - 3) 評議委員は、普通会員および学生会員の中から、普通会員、シニア普通会員、シニア永年会員、学生会員による直接選挙で選出される。
 - 4) 幹事は、会長が推薦する候補会員を評議委員の過半数が承認することにより選任される。
 - 5) 会計監査は、会長が推薦する候補会員を評議委員の過半数が承認することにより選任される。
 - 6) 会長は評議委員会を招集し、その議長を務める。幹事は評議委員会に出席するものとする。
 - 7) 評議委員会は会員を代表して、本会の事業計画、経費の収支、予算・決算、学会誌の発行、大会の開催、その他重要事項について審議し、出席評議委員の過半数をもって草案を議決する。決議された事項は財団理事会の承認を得るものとする。評議委員会は全評議委員の3分の2以上の出席をもって成立とする。やむおえない事情の場合、委任状の提出あるいはオンライン参加も参加とみなすことができる。
 - 8) 会長ならびに幹事により幹事会を構成し、会長がこれを代表する。
 - 9) 幹事会は、本会の関連事項を論議し評議委員会に諮ると共に、会務を執行する。
 - 10) 会計監査は、本会の会計を監査する。
- 第10条 運営委員および評議委員の任期は2カ年とする。会長および評議委員は連続三選はできない。
- 第11条 本会の事務年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。
- 付則 この規程は、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律に定める公益法人の変更認定申請に基づいて、定款の変更が成された日から施行する。
- 付則 平成29年9月12日に第6条を改正し、平成30年4月1日から施行する。
- 付則 平成31年3月8日に第11条を改正し、平成31年4月1日から施行する。
- 付則 令和1年9月12日に第1条、第5条、第6条、第7条、第8条、第9条を改正し、令和1年9月13日から施行する。
- 付則 令和2年9月18日に第9条を改正し、令和2年9月19日から施行する。
- 付則 令和4年3月31日に第3条、第6条を改正し、令和4年4月1日から施行する。

Genes & Genetic Systems 第99巻1号 2024年4月10日発行 非売品 発行者 岩崎 博史 印刷所 レタープレス株式会社 Letterpress Co., Ltd. Japan 〒739-1752 広島市安佐北区上深川町809-5番地 電話 082 (844) 7500 FAX 082 (844) 7800 発行所 公益財団法人 遺伝学普及会 日本遺伝学会 Genetics Society of Japan 静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所内	学 会 事 務 取 扱 〒411-8540 静岡県三島市谷田・国立遺伝学研究所内 公益財団法人 遺伝学普及会 日本遺伝学会 https://gsj3.org （電話・FAX 055-981-6736） （振替口座・00890-1-217316） 加入者名・日本遺伝学会 国内庶務、渉外庶務、会計、企画・集会、将来計画、編集などに関する事務上のお問い合わせは、各担当幹事あてご連絡下さい。 乱丁、落丁はお取替えます。
---	---